

Citation: Sharif MO, Fedorowicz Z, Drews P, Nasser M, Dorri M, Newton T, Oliver R. Interventions for the treatment of fractures of the mandibular condyle. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2010, Issue 4. Art. No.: CD006538. DOI: 10. 1002/14651858. CD006538. pub2.
CRG名: Tobacco Addiction

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 11 March 2010
Clib issue No.; N/U: 2010 issue 4; New

背景: 下顎骨の骨折のうち、下顎頭に生じるものはその25-30%とされている。この下顎頭骨折の治療法には、保存(非観血)的治療と整復固定を伴う観血治療があり、いずれの治療法にも合併症が生じることがある。たとえば、保存的治療には慢性痛や下顎の運動域の減少に加え不正咬合、特に前歯部開咬、後顔面高径の減少や顔面の非対象が生じる。一方、観血治療では皮膚上の癍痕や一時的な顔面神経麻痺は、希な合併症ではない。下顎頭骨折の治療法のうち、観血的もしくは非観血的な治療法の適応をめぐるコンセンサスは現在のところ不足している。

目的: 下顎頭骨折の治療に用いられている治療法の有効性について検証すること。

検索戦略: データベースサーチは、Cochrane Oral Health Group's Trials Register (2010年3月12日まで)、CENTRAL (The Cochrane Library 2010, Issue 2)、MEDLINE (1950年から2010年3月12日まで)、EMBASE (1980年から2010年3月12日まで)から行った。適応となる全ての参考文献を、追加調査・照会を行った。著者には、公表の有無にかかわらず追加の試験についての詳細を電子メールにて尋ねた。言語による選択の制限は設けず、またいくつかの報告では翻訳を行ったものもあった。

選択基準: 適格基準は、18歳以上の成人の片側もしくは両側の下顎頭骨折症例を対象としたランダム化比較試験とした。観血治療法、保存的治療法に関わらず、全ての整復固定治療を検討した。

データ収集と分析: 著者は、適格基準によりスクリーニングを行った。抽出したデータは固定効果モデル(fixed-effect model)を用いて統合を行ったが、研究間にかなりの異質性が認められた場合には、変量効果モデル(random-effects model)を用い、研究間の均質性を担保した。平均値の差異は連続量による結果から、また二値アウトカムによる結果の場合には95%信頼区間を伴うリスク比にて算出した。

主な結果: 適格基準に合致した質の高いエビデンスを見いだすことは出来なかった。

レビューアの結論: 本レビューに関して、適格基準に合致した質の高いのエビデンスは見いだされなかった。検討した2種類の治療法の有効性などについて明確な結論を導き出すことは出来なかった。今後、良く検討されたランダム化比較試験が必要である。臨床研究を行う者は、結果に影響する追跡脱落や評価対象とする患者について考慮すべきである。また、直接もしくは間接的な介入に要する費用についても報告すべきである。

(翻訳 水口 一・監訳 豊島義博; JCOHR)
翻訳公開日: 2011年12月16日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がありましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。